

# 大日本人

2007(平成19)年6月3日鑑賞<梅田ピカデリー>



## 第7章

バカバカしさ面白さは紙一重

監督・脚本・企画＝松本人志／出演＝松本人志／UA／竹内力／神木隆之介／海原はるか／板尾創路（松竹配給／2007年日本映画／113分）

……カンヌ国際映画祭でのブーイング(?)と反比例するかのように、日本では若者を中心として大人気の様相を……。その原因は、独創性溢れた「松本ワールド」のすばらしさ……と言えればいいのだが、それは私に言わせれば、完全にマスコミが作り上げた虚構の世界……。こんな映画の一体何が面白いの……？ また、キーワードとなる「ヒーローの表と裏」にしても、マゾヒスティックで不気味なだけ……。したがって、この映画は今年断トツのワースト1！ そう断言した以上、いくら多勢に無勢となっても、また百万人の敵と立ち向かうことになっても、反論に対してはきちんと再反論していかなければ……。

## 人気は上々！ しかし、その中身は……？

「松本人志監督、大日本人！」の宣伝は上々、そして人気も上々。6月2日(土)に公開されたこの映画は、私が観た翌3日(日)の4時20分からの分も満席だったから、6月1日(金)に座席をキープしていなければ次回回しになっていたはず……。

観客はアベックの若者が9割で、あとの1割が夫婦50割引き組……？ したがって、おじさん1人で座っていたのは私くらいのもの……？ アベックの若者が多いということは、つまり行儀が悪いということ。またポップコーンと飲み物がバカみたいに売れるということ。こいつらは、映画をアベックで観る時はそれが必需品であるかのごとく、予告編上映中もズラリと売店の前に並んで買い求めるから、劇場にとってはありがたい客。しかし、早い目に席について待っている行儀の良い観客にとっては、暗くなってから飲み物とポップコーンを持ってしゃべくりながらおもむろに座席に入っ

てくるアベックは迷惑なもの。もっとも、本人たちはそんなこと何とも思っていないのだから、「すみません」のひと言がないのも、ある意味当然……？

こんな奴らが列をなして観にくる松本人志監督の映画って一体どんなもの……？  
このように人気は上々、しかしその中身は……？

## 15分も経つとイライラと……？

私が予約する席は、いつも1番後列の真ん中の席。したがって、スクリーンを観るにはベストポジションだが、途中で席を立つには不便。ましてや、満席になっている時は至難のワザ……。ところが今回は、①大佐藤がバスの中でインタビューを受けている冒頭のシーンから、②大佐藤が駅前を歩き、コンビニに寄って買い物をするシーン、③大佐藤の家の中で受けるインタビューのシーン、④行きつけのうどん屋で大佐藤がカうどんを食べるシーン、を観ながら約15分ぐらい経つと、インタビュー形式のうっとうしさにイライラし、途中で席を立ちたくなってきた。また、その形式もさることながら、くだらない質問とそれに対する何ともあいまいでワケのわからない松本人志扮する主人公大佐藤の回答の仕方を聞いているとそれだけでさらにイライラ……。

パンフレットの中には、2007年1月25日の東京プリンスホテルパークタワーボールルームにおける、約600名の報道陣を前にした松本人志のインタビュー記事が掲載されているが、映画鑑賞後この質問と答えを読むと、座席でのイライラを再度思い出すことに……。あえてあいまいな受け答えに終始していることは明らかなのだが、つい「一体何やねん！」と叫びたくなったのは、ひょっとして私だけ……？

## かなりの自信作だが……？

パンフレットにある「監督からのメッセージ」を読むと、「『おいしい』ことだけは保証します」とあるし、また取材ディレクター役で企画協力の長谷川朝二氏の「撮影日誌」にも、「監督いわく、『2回、3回と見た方がおもしろくなる』映画です。笑いのトラップがたくさんあって1回では全部把握できないからだだと思います」とあるから、かなりの自信作であることはたしか。

そして、この映画はもともと秘密のベールに包まれていたが、これだって私に言わせれば、アホなマスコミをあおるための営業戦術の1つ……。結果的にそんな秘密主義を貫き、マスコミの飢餓感をあおった戦術は大成功！ さらに、「カンヌなんて関

係ないよ」というポーズをとりつつ、打診を受けたプロデューサーたちは喜び勇んでその調整をしていたことは明らかで、第60回カンヌ国際映画祭「監督週間」への招待には、正直私もビックリ。しかし、映画は前評判も大切だが、所詮中身で勝負！ 少なくとも私は、前述の自信の言葉に対しては「よくそんなことが言えるナ」とお返ししたいが……。

## カンヌでのブーイングは当然……？

2007年の5月16日から27日まで南フランスのカンヌで開催された第60回カンヌ国際映画祭で、河瀬直美監督の『殞（もがり）の森』が、小栗康平監督の『死の棘』（90年）以来の審査員特別賞（グランプリ）を受賞したことが大きな話題となった。他方、5月28日には、ミス・ユニバースの世界大会で森理世が児島明子以来48年ぶりに栄冠を射止めたという話題で日本国中が湧いた。

幸いその陰に隠れてあまり報道されなかった（？）のが、カンヌ国際映画祭の監督週間に出品された『大日本人』が賛否両論に分かれ、途中で席を立つ観客もたくさんいたらしいということ。自信家（？）の松本人志は、「これはもともと日本人をターゲットにした映画だから、フランス人にはこの映画のダラダラ感が理解しにくい面があるかも……」と「弁解」していたが、私にはそうは思えない。要するに、面白くないものは面白くない、というのがコトの本質だ。

したがって、問題は何が面白いと思うかという観客の質と、どんな観客がどんな面白さを欲しているのかというニーズを感じ取る監督の能力に帰着するはず……。私は『殞の森』は、最初からフランス人受けを狙っている感じが強いからあまり好きではないが、それでも監督の視点や人生観を明確に打ち出し、それを観客にアピールしている点は立派なもの。しかし『大日本人』は、あらかじめアホバカテレビバラエティ番組の延長線上にあるアホバカ観客を想定し、そのアホバカ観客に受け入れられる面白さを追求しただけの映画……？ したがって、私たちはアホバカ観客ではないというプライドの高いカンヌで、『大日本人』がブーイングを受けたのは当然……。

## 天才ぶりは？ 独自性は？ そして松本ワールドは？

マスコミは天才北野武に続いて、無責任に天才松本人志の誕生とあおっているし、彼自身も自分を天才だと思っているフシがあちこちに……？ また天才とまではいか

なくても、松本人志の独自性、特に自分にしかないものという自意識はめっぼう強く、それが彼が生きていくうえで最も大切な原動力に……？　そこで、人はそれは「松本ワールド」と呼んでおり、私もそれは十分に認めるもの。

しかし、その松本ワールドがテレビのアホバカバラエティー番組で発揮されている限りはそれでいいのだが、こと1本の映画となり、映画監督松本人志ともなると、その映画の中で描かれる松本ワールドとは何か、そしてその評価は、という問題にどうしても立ち入らざるをえなくなってくる。そこで、この映画にみる松本ワールドのくだらなさを、以下4点について私なりに評論してみたい。

### 松本ワールドのくだらなさ その1——大佐藤の発想

この映画は、ひと言で言えばヒーローものだが、加山雄三の「若大将」のような明るいヒーローではなく、勝新太郎の座頭市のような陰影のあるヒーローにしたのが、松本ワールドの松本ワールドたる所以……？　彼が発した「ヒーローの表と裏」という突飛なキーワードから、この映画の脚本が生まれたとのことだが、たしかに大佐藤というヒーローには、表と裏、光と陰、栄光と挫折がある。

スーパーマン、スパイダーマン、バットマンなどのヒーローやウルトラマンなどのヒーローが生まれてくるには、それぞれの事情があるのが当然だが、人間の身体に電流を流す中で生まれてきたのが大佐藤だという松本ワールドは、私に言わせれば、何ともサディスティックかつマゾヒスティックそしてかなり不気味なワールド……？

座頭市は目が見えないうえ、下層の世間を生きているものの、意外に純情で善良なところが魅力……？　しかし、市川雷蔵の眠狂四郎は將軍家のお種ながら、生まれてきてはならない子として生まれてきただけに性格が少しヒン曲がっているのは当然。しかして、身体に電流を流すことによって巨大になっていったという大佐藤家の歴代のヒーローのキャラは……？　そこでまずは、栄光に満ちたヒーローではなく、表と裏のあるヒーローにしたいという松本ワールドの功罪は……？

### 松本ワールドのくだらなさ その2——こんな(怪)獣の何が面白いの？

この映画に登場してくるのは怪獣ではなく、獣であるというのが、松本ワールドのこだわりの1つ。また、それに奇妙な文語調の解説文をつけているのが松本ワールドの独自性……？　さらに言えば、①縮ルノ獣（海原はるか）、②跳ルノ獣（竹内力）、

③匂ウノ獣（メス）（板尾創路）、④睨ムノ獣、⑤童ノ獣（神木隆之介）というアイデアも独自性がいっぱい、もっと言えば笑いの天才と言いたいはず……？

ところが、チャップリン映画を観て、チャップリンが笑いの天才だと思う人は多いはずだが、こんなくだらない獣の姿やその獣と巨大化した大佐藤が戦う（？）姿を観てそれを面白いと思うのは、毎日、テレビのアホバカバラエティー番組を観て、ゲラゲラ笑っているアホバカ日本人だけ……？ 私はこんな獣の姿を観て、1度も面白いと思ったことはなかったが、それは私がヘンなせい……？

### 松本ワールドのくだらなさ その3——不幸な生い立ちは笑いではなく不気味……？

インタビューに対する大佐藤の受け答えの特徴は、歯切れが悪いこと。今松本人志が扮している大佐藤は6代目のようで、4代目すなわちおじいさんの話がインタビューの中でさかんに登場する。それに反して少ないのが5代目の父親の話……。

詳しいことは、映画を観て、そのインタビューを直接あなたの目で確認してもらいたいが、ポツリポツリと語られていくインタビューの中で、大佐藤の不幸な生い立ちが少しずつ明らかになってくる。その生い立ちが、悲しい中にも笑いを生む物語ならそれでいいのだが、私に言わせれば、これもマゾヒスティックで何となく不気味。おじいさんの時代、大佐藤は社会的評価も高くかつ経済的にも豊かだったらしいが、お父さんの代を経て、今の代になると生活には困らないものの、次第に落ちぶれていると自覚せざるをえないし、ご近所からはかなり嫌われているよう……。こんな大佐藤の生い立ちを見て聞いて、一体何が面白いの……？

### 松本ワールドのくだらなさ その4——こんなイジメも笑えるの……？

この映画は天才松本人志が監督しているだけに、終盤に至って突然新たな正義派のウルトラマン的キャラが登場し、大佐藤もそれに合流することに……？ そしてそこで展開されるのがある獣（？）に対するイジメ……。としか私には思えないような、徹底した多人数（？）による攻撃。そのドタバタ活劇を受けて、これまた天才松本ワールドらしい大団円（？）に集約されていくのだが、このイジメ（攻撃）は見ていて目を覆いたくなるようなもの。ところが、私の隣りに座っていたおばさんは、それをさかんに大声をあげて笑っていたからビックリ……。

今ドキの子供たちが、ゲーム感覚で次々とパソコン上の画面に登場する獲物を「処

分」していく中で、快感を得ているように、アホバカバラエティー番組には、いじめられ役キャラの人間がおり、それをトコトンやっつけるシーンが登場する。そして、それを他人事としてゲラゲラ笑って見ているおばさんたちも多いようだが、それはあくまで茶の間だけにして、映画館の中に持ち込むのはやめてほしいもの……？

## 映画が映画なら、観客も観客……

冒頭にも少し書いたように、映画のレベルと観客のレベルは正比例するもの……？ アベックの若者たちの行儀の悪さは場合によればあらたまののかもしれないが、中年夫婦の行儀の悪さは死んでもなおらないのでは……？ そんなコトを痛感せざるをえなかったのは、運悪く私の左隣りに座ったおばさんが、映画鑑賞中、2度も3度もバッグの中からお菓子を取出し、バリバリと音をたてながらその袋を破り、本人は気持ちのいい歯音をたてながら、いかにも楽しそうに腹の底から笑っていたこと。さらにその左に座っていたその夫（らしきおじさん）は、妻が破いた袋に手を伸ばしては、これまたバリバリ、ポリポリ……。「ここはお前の家のリビングルームではなく、公共空間たる映画館だぞ」と怒鳴りたくなかったのは当然……。

でも考えてみれば、映画終了後、「面白かったネ」と仲良く声を掛け合っていたから、日曜日の夕方、あらためて夫婦の絆の強さを確認し合えたのでは……？ すると今日は、これからどこかで豪華な食事をして、ひょっとしてどこかへシケ込むのかも……？ こんな夫婦和合、夫婦円満に役立つ『大日本人』は、立派といえば立派かも……？

## これは断トツのワースト1

以上述べてきた（ケチをつけてきた……？）ように、私はこの映画に何の面白みも感じる事ができず、内心舌打ちばかりしながら鑑賞した2時間弱だった。ただ2つだけ評価できるのは、小堀マネージャー役として登場した実力派歌手 UA の独特の存在感と、パンフレットの中にある出雲経済大学国史名誉教授志摩理素氏の「仮説・大日本人論」というコラムの面白さ……。それ以外は自信をもって、「こんな映画はダメ！ この映画は私の今年断トツのワースト1」と宣言していきたくて考えている。もちろん、こんな私に対する反対の意見も多いと思うので、そんな方はいくらでも反論をどうぞ……。

2007(平成19)年6月4日記